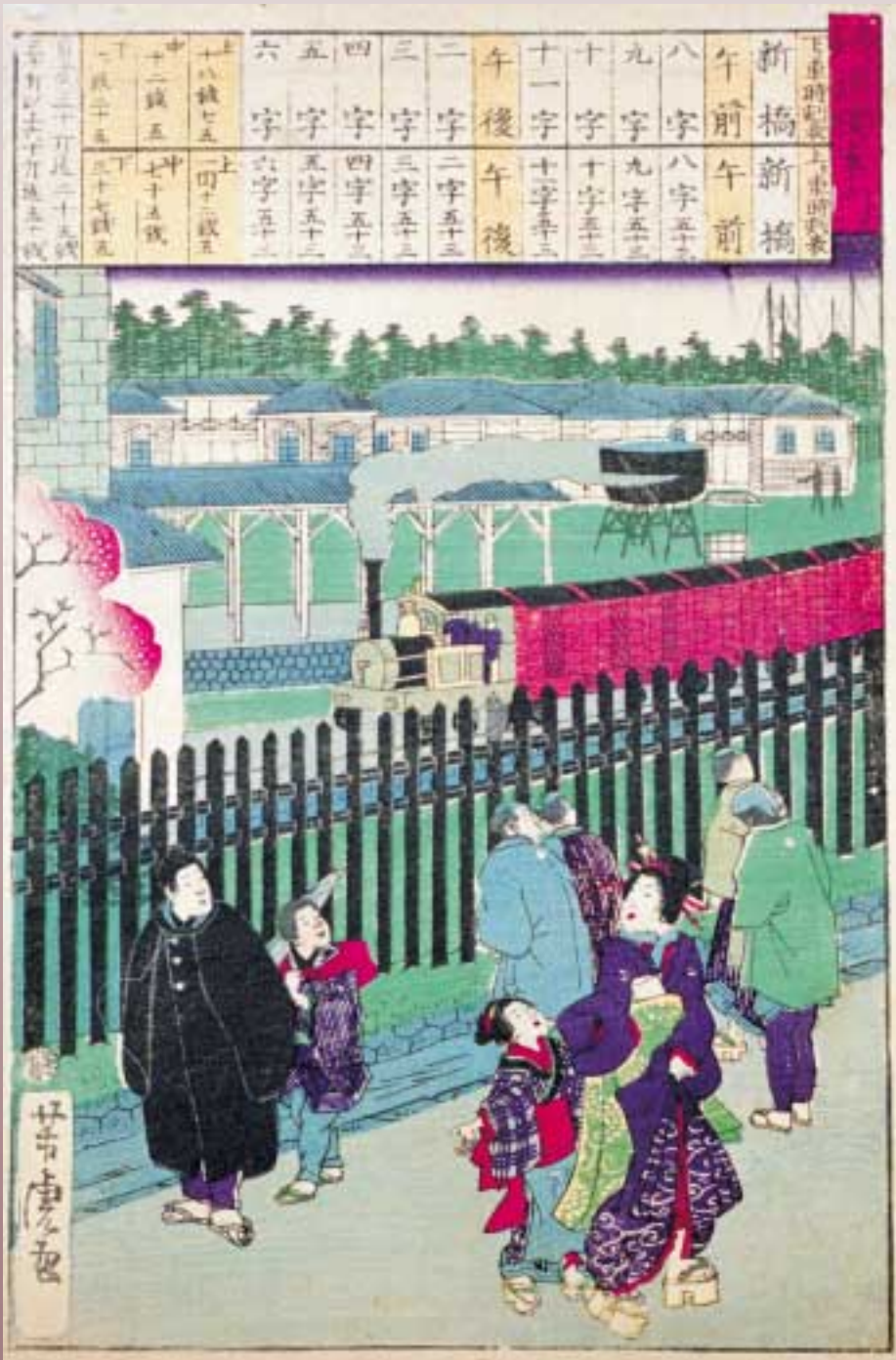


豊田市
郷土資料館
だより
No.34

Toyota City Museum
Of
Local History



「鉄道独案内」

1872（明治5）年、新橋・横浜間に初めて
鉄道が開通しました。上り下りとも1日に9
本、運賃は三段階にわかれていました。

目次

・企画展開催レポート『食の民俗』展	2
・郷土史調査レポート	3
・収蔵資料の紹介	4
・世界民族芸能祭「ワッショイ！2000」参加レポート	6
・発掘調査速報・季節の民具「炬燵」	7
・文化財シリーズ・資料館ニュース	8

収蔵資料紹介：「錦絵」

明治維新以後、新しいものがどんどん
入ってきて、それらを人々に紹介するた
めの錦絵が作られました。

（本館所蔵）



「亜墨利加国蒸気車往来」

食の民俗 ―弁当箱・ハレの日の食の道具―

今回の企画展は会期を2つにわけてそれぞれのテーマの展示となっています。会期の前半（10月13日～11月19日）は「弁当箱」を、後半（11月21日～12月24日）は「ハレの日の食の道具」をテーマに展示しています。

弁当箱 前期は秋の行楽シーズンにあわせて郷土資料館所蔵の数多くの民具の中からお弁当箱を集めてみました。現代社会では様々な場面に様々なお弁当が利用され、産業のひとつにもなっていますが、古くからのお弁当はどのような場面で、どのようなものが使われていたのでしょうか。この展示では代表的なお弁当箱をとりあげて探ってみました。

現代の家庭で利用されている樹脂製の弁当箱や駅弁の代表である信越線横川駅の釜飯を参考資料として展示したほか、アルマイト製の弁当箱、めんば・籠弁当・行李弁当、破子弁当・重ね食籠・提重・重箱などを展示しました。アルマイト製の弁当箱は昭和30～40年代にはよく使われましたが、近年では樹脂製の弁当箱に取って代わられて、ほとんど使われなくなっています。めんば・籠弁当・行李弁当は農作業や山仕事の際に用いられた作業用の弁当箱です。その他の弁当箱は芝居見物・物見遊山など、どちらかというとき非日常的な場面で使われたものです。特に提重は酒器を伴ったもので、遊びに出かけるときに用いられました。

また、単に弁当箱を並べて展示するだけでなく、各種の弁当箱に詰められた食采を時代背景や使われた場面などから復元したコーナーをつくって展示しました。



いろいろな弁当箱

ハレの日の食の道具 後期の展示ではハレ（晴れ）の日に使用された食の道具を展示しています。ハレ（晴れ）とは原則として年中行事や神祭のときをさします。これに加えて人の一生の節目に行う通過儀礼としての出生・成人・婚姻などに伴う祝儀も非日常的であることからハレの行事とされてきました。食に関しても、これらのハレの日には普段使いの道具とは違ったものが使われました。収蔵資料を中心としているので偏りがありますが、様々なハレの場面で使われたもののうち、角樽・指樽、行器（ほかい）、菓子の型、押し鮭の型、高脚膳などを展示しています。



行器と指樽

ハレの日は普段は食さない魚を積極的に食べたり、酒を飲むことが許されたことから、これらに関係の深い器や道具がみられます。

角樽・指樽は祝樽で結納・嫁入りなど祝いの場面で使われました。行器は冠婚葬祭において赤飯を入れて贈ることなどに2つ1組で用いられた器です。

菓子は主に3月の節供や5月の節供を中心にハレの日に用意されたもので、今回の展示では3月の節供に作られた菓子の木型を展示しています。また、すしは本来魚類の保存の為のもので、手間がかかり、日常の食物ではありませんでした。祭礼や正月に間に合うように1ヵ月近く前から用意して、その出来具合を楽しむものでもありました。そうした押し鮭の型をいくつか紹介しています。

また、膳のうち、日常的に用いられた箱膳とは異なる2脚もしくは4脚の高い脚のある膳はやはり特別なときに使われた膳でした。今回は指物で漆塗りのものをいくつか展示しています。

（杉浦 裕幸）

明治用水旧頭首工の人造石工法

豊田市水源町にある明治用水の頭首工(川をせき止め、水を用水路に引き込むための施設)から少し上流に、明治34～36年に造られた旧頭首工が部分的に残っています。現在残っている旧頭首工の遺構は、横断堰堤の約3分の1と、^{こうもん}閘門、導水堤の一部です。これらの遺構は、一見、石積みによって造られているように見えますが、「人造石工法」という特徴的な工法によって造られています。



明治用水旧頭首工跡

人造石工法は、伝統的な技法である「たたき」を改良して大規模な土木構造物の築造に利用した工法で、近代の産業史や技術史からも注目されています。

たたきは、日本の伝統的技術として、土間・かまど・井戸側・泉水・堀・倉庫・住宅壁・水路・護岸などに、左官業で用いられてきました。このたたきを人造石工法として大規模工事に応用した人物が、服部長七です。

服部長七は、1840(天保11)年に碧海郡北大浜村(現在の碧南市)で、左官職の三男として生まれました。長七はたたきの材料の配合や練り方を研究し、水の浸入を防ぎ、化学的な作用で水中でも凝結する人造石工法を発見しました。これを応用して明治11年から37年まで、全国各地において築港工事や護岸工事を精力的に手がけました。明治用水の旧頭首工も、長七が築いた構造物の一つです。

たたきと人造石は、石灰(主として消石灰)と種土(花崗岩が風化したサバ土・真土・真砂)を原料にしているので、基本的には同じものと考えられます。ただし、材料の配合比率は一般用のたたきが石灰1:種土4～10の割合であるのに対して、人造石用のたたきでは石灰1:種土8～15の割合でした。また、人造石工法においては、土の練り具合にコツがあったようです。その練り具合は、練り土を十分締め固めた際に、

表面に水がしみ出る程度が良いとされています。人造石が硬くなる原理は、原料の消石灰が空気中の炭酸ガスと反応して、不溶性の炭酸カルシウムとなることです。また、水中で硬化する性質を持っており、水中の構造物にも用いられました。

人造石工法による構造物の形成には、構造物の規模などにより、①人造石(たたき)だけで全体を形成する、②外側を自然石とたたきで張り、内部に土砂を充填する、③本体をたたきで形成し、外側をたたきで接合した石積みで保護する、という3種類の方法があります。

明治用水の頭首工は、最も堅固な③の人造石と自然石との組み合わせで築かれています。この築造方法の特徴は2つあります。1つは練り土を厚さ1寸(3.3cm)ごとに締め木で打ち締め、水分のしみ出しを認めたら練り土をまき足し積み上げていくこと、もう1つは割石相互の間に厚さ2寸から3寸ほど練り土を充填し、石と石を接触させず練り土のなかに自然石が浮いている形にすることで、これが石垣の目地塗りなどとは異なる点です。

明治の初期には、セメントが高価な輸入品であり、国内で生産されたものは品質が安定しなかったこと、逆に、人造石の材料の消石灰やサバ土の調達は安価で比較的容易であったこと、職人の人件費が安かったことなどの理由から、土木工事に人造石工法が盛んに使われました。しかし明治の後半以降は、国内でも安定した品質のセメントが量産され、安価で容易に調達できるようになり、コンクリート工法が普及していきます。人造石工法は、コンクリート工法に対して安価にできるメリットを失い、また服部長七の技術を受け継ぐ後継者が育たなかったことなどから、次第に姿を消していきました。

明治用水の旧頭首工は、昭和33年に現在の頭首工ができるまでの約50年間、矢作川の水勢や洪水に耐え、今もその姿をとどめて人造石工法の堅牢さを実証しています。なお、豊田市内には服部長七が築いた人造石の構築物として、旧頭首工の他に鷺鴨町の^{よしいけ ひもん}葭池樋門(明治用水; 家下川)があります。(天野博之)

《参考文献》

- 天野武弘 1994 「明治用水旧頭首工—人造石工法による近代的堰堤の先駆—」産業考古学会編 『日本の産業遺産300選3』
大橋公雄 1998 「人造石(たたき)工法とその遺構」中部産業遺産研究会『産業遺産研究5』
明治用水土地改良区 1984 『明治用水』 復刻版

収蔵資料の紹介

機織り機

郷土資料館の庭には、民俗資料館という江戸時代の民家を移築した建物があります。ここでは、農耕道具をはじめ、近代のくらしを語るさまざまな生活用具を展示しています。なかには市内猿投町の方から寄贈を受けた「機織り機」も展示されています。

前号に引き続き、全国の機織り機を調査している市内在住の木綿研究家佐貫 尹^{さぬき ただす}氏に、資料調査の結果を報告していただきました。

1 古いタイプのつむぎ機

私どもは10数年前から各地の古いタイプ（吊り^つ箴^{おさ}・箴引き式）の機織り機（以下高機^{たかばた}とする）の探訪を続け、日本の高機をその姿と仕組みから5つの系列に分類することができました。¹⁾郷土資料館に展示の高機を含めて各地に残る高機の大半は^{つむぎ}紬や麻や木綿を織ったつむぎ機なので、この5つの系列をつむぎ機としてまとめると次のようになります。

系列1：西陣のしなやかな仕組みの絹機（全長約3m）を改造したつむぎ機で全長約1.8m。知多半島周辺・岐阜県全域、中国・四国・九州地方などに分布。

系列2：別製絹織（図1）を規範とするつむぎ機で、斜めに仕組む部分が多いのが特徴。全長約1.8mで絹機は存在しない。三河・知多地方、岐阜県美濃地方のほか、三重・滋賀・奈良・兵庫の諸県と山陰地方などに分布。

系列3：頑丈で全長3mを超える関東の絹機を改造したつむぎ機で、こちらは全長1.8m前後。関東から新潟県見附市周辺、岐阜県全域・愛知県尾張地方などに分布。

系列4：系列1と系列3の融合型つむぎ機、約1.8mで絹機は存在しない。三河・知多地方を含め岐阜・長野・山梨・神奈川・群馬・茨城などの各県に分布。

系列5：系列2と系列3の融合型つむぎ機、全長約1.8mで絹機は存在しない。三河地方と静岡県、近畿・中国地方に分布。

上記の系列の機の改造の手法には次の3つの共通点があります。

その1：仕組みの簡略化・小型化・細材化等の改造。

その2：高機脚部の強化をし、さらに簡略化・小型化・細材化等の改造を施す。

その3：脚部の強化と鳥居の柱の補強に加えて、簡略化・小型化・細材化等の改造。

※脚部の強化については異系列の部分融合も含む。

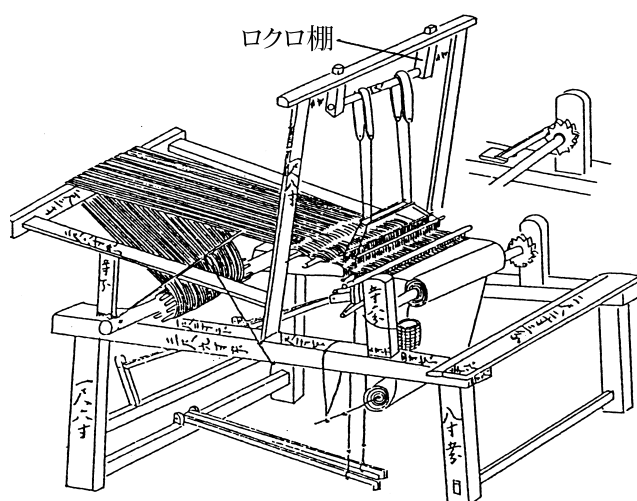
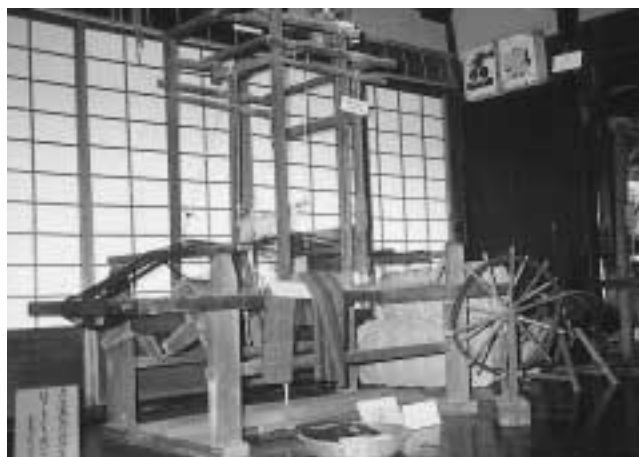


図1 系列2の規範・別製絹織²⁾（京都の菅大臣機）斜めに仕組む部分が多い。『機織彙編』より

2 郷土資料館に展示の高機

この高機の現状は、ボタン³⁾を取りつけるための改造がなされ、本来の姿と仕組みがわかりにくくなっているので、元の姿と仕組みに戻して作図すると図2になります。作図には欠落部分を補うために関連をもつ6台の高機を参考にしました。6台とは東加茂郡下山村、足助町、旭町、安城市、名東区、岐阜県郡上郡八幡町の高機で、いずれも前記の系列2に所属します。これらの高機は図2のようにロクロ棚と箴吊り棒を下から支える柱を含めた鳥居の部分（以下ロクロ棚まわりとする）の姿と仕組みが系列2の高機としては特異であり、上記の6台はその特異性を共有しているので、一見すると図2の高機は広範囲な改造による仕組



郷土資料館に展示の高機

みの簡略化等で本来の姿が半減し、この高機単独では所属する系列を1とするか2とするか決めかねますが、同じ特異性を共有する近隣の上記6台の高機がすべて系列2に所属することから、図2の高機も所属系列を2と定めることができました。

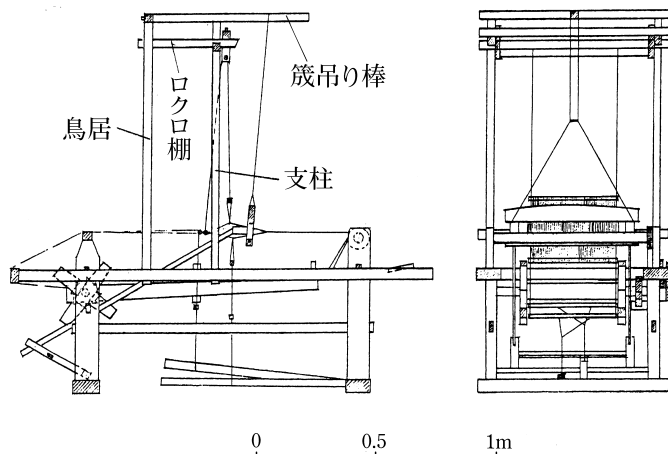


図2 郷土資料館に展示の高機
(本来の姿と仕組みに復元製図)系列2に所属。
規範(図1)との対比

次に系列2の高機として図2のロクロ棚まわりの特異性がどこからきたものかについては、漠然と系列3の高機の影響を受けたのではないかと感じていました。話は前後しますが、ある時高山市で偶然上記の6台のうちの1台・郡上郡八幡町採集の系列2に所属する高機に出会ったのです。この時直ちに思い当たったのは郡上郡明宝村で採集した系列3に所属する図3の高機です。

郡上郡一帯にはこれと同じ姿と仕組みの高機が分布、また同じ系列3に属する同じ仕組みの高機は東京都武蔵村山市周辺に分布しており、図3の高機は、系列3

として特異な姿と仕組みではありません。

このことから郡上郡一帯に西から伝わった系列2の高機は東から移植された系列3の高機と出会い、そのロクロ棚まわりの強固さに魅せられて、系列2の高機としては特異な姿と仕組みを敢えて採り入れたのではないかと推察いたします。

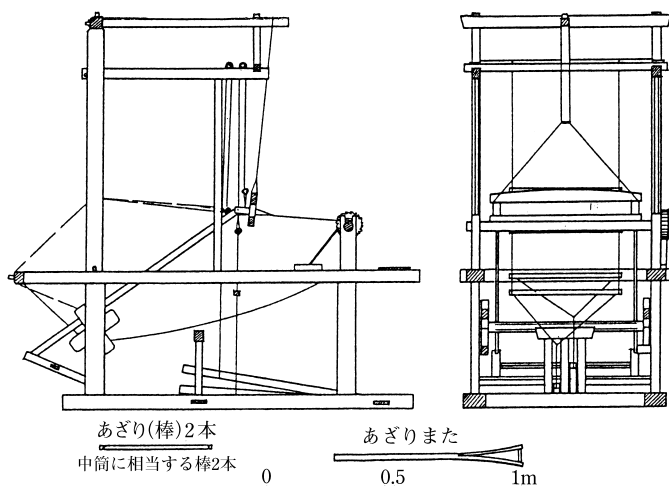


図3 岐阜県郡上郡明宝村で採集の高機
系列3に所属。筆者所蔵

3 高機探訪のロマン

私どもの高機の探訪は姿と仕組みを入口にして、その高機がどこから伝えられ・どこにつながりを持ち・何を織ったのか。一方地域の人々はその高機をどのような気持ちで受け入れたのか・改造にはどのようなポリシーでのぞんだのか等、対話は尽きません。この間いろいろな高機が彷彿し思わずその場に座り込んでしまいます。ややあって我にかえり急いで帰り支度をすることがしばしばなのです。郷土資料館に展示の高機をめぐって、系列2と系列3の高機の間にはどのようなロマンが秘められているのでしょうか。

注1) 佐貫 尹「高機の系列編成とその地域分布」『産業考古学会報』65号 産業考古学会(1992)

注2) 佐貫 尹「別製絹機は京都の菅大臣機」『産業考古学』90号 産業考古学会(1998)

注3) 経糸と織り交わすために管に巻いた緯糸を舟形の杼にとりつけ、これを手で杼口に投げ入れるかわりに紐を引いて杼を飛ばす装置

(木綿伝承工房きぬた 佐貫 尹 佐貫美奈子)

世界民族芸能祭「ワッショイ! 2000」参加レポート

7月28日から8月6日の10日間、堺市大仙公園（地球村ジオ）・堺旧港周辺会場（地球村ベイ）を主会場に西暦2000年世界民族芸能祭「ワッショイ! 2000」が開催されました。「ワッショイ! 2000」では、日本各地の地域に根付いている行事や特色ある伝統芸能団体などを招き、世界87団体、国内55団体が集まりました。

海外演者については、民族芸能に関する学識経験者5名で構成される「海外演者招聘検討会議」で候補団体を選考し、在日の大使館・領事館などの協力を得ながら決定しました。決定にあたっては、交流の視点を重視するとともに、広く知られた民族芸能だけでなく、先住民族の芸能をはじめ、紹介されることの少ない民族芸能に接する機会の創出に努められました。

国内演者については、「国内演者招聘検討会議」で候補団体を選考し、各都道府県の協力を得ながら決定しました。決定にあたっては、日本の芸能文化を世界に発信することができ、エネルギーで活動的、次代を担う青少年によって演じられる芸能を基準に選考されました。

こうした中で、豊田市棒の手保存会が招聘されたことは、大変名誉なことであり、福岡会長始め15名の保存会員一同、豊田市、愛知県、いや日本を代表して演技しようと心に誓い「ワッショイ! 2000」に臨みました。

7月28日（金）午前6時30分、豊田市を後に一路、大阪へ。堺市の出演者センター（大阪女子大学）に無事到着し、控え室にて待機。

この日は、初日で開会式が盛大に行われ、その後風の舞台、水辺の舞台、太陽の舞台、星の舞台、宙の舞台と五つのステージで民族芸能が披露されました。

とても暑い日で、棒の手の衣装に着替えた途端、汗が噴きだします。14時控え室から宙の舞台へ。

意外と狭い舞台、長柄の鎌が振り回せるのか少し心配になりましたが、14時20分演技開始。

猿投上切の見当流を皮切りに、猿投下切の鎌田流、四郷の鎌田流、藤牧検籐流、松平の起倒流、宮口の鎌田流と木太刀、刃物と次々に演技を行い、汗の滴り落ちるのも忘れる程、時間の許す限り真剣に演技を行った。観衆を魅了し、終了後の拍手に満足感を覚え舞台

を後にした。次に演技を控えていた、スウェーデンの民族芸能集団からも歓声と記念写真攻撃にあうほどで、棒の手の衣装はインパクトがあったようである。



豊田市棒の手保存会 熱演のようす

18時10分、星の舞台に場所を移し、2回目の演技を行った。星の舞台は、宙の舞台より大きくて観衆も多い。みんな1回目よりもだいぶ力が入って気合いも十分である。殺気立った演技も、観衆と一体となり、あっという間に時間を迎え、無事に初日の演技を終了した。皆、満足感と疲労感で20時に宿舎へ着くと、食事を早々に済ませ、部屋へと急いだ。

2日目も宙の舞台で11時50分と14時30分の2回演技をした。ここでもドイツの集団と交流をすることができ、真夏の日差しに負けないよう真剣に演技を行えた。時間があったので、すぐ隣の仁徳天皇陵の特別参拝も行うことができました。

最後の演技は、隊列を組み「オッサイ、オッサイ」と声を掛け、時間を延長し、持てる力の限り演技してきました。

豊田市棒の手保存会が世界民族芸能祭の目的にどれだけ近づけたか分かりませんが、福岡会長始め15名の保存会員全員が真剣に演技に取り組み、ドイツやスウェーデンの方々や観衆との交流を通して、我々にも大きく影響を与えたことは間違いありません。今後も郷土芸能の保存に力を入れて取り組んでいきたいと思っています。

最後に、ご協力いただいた関係者の方々に深く敬意を表します。ありがとうございました。

（豊田市棒の手保存会 梅村 浩明）

発掘調査速報

○古城遺跡 御立町2・11丁目]

古城遺跡は県立高校建設と市道建設に先立ち、11月現在、約2300㎡を発掘調査しています。検出された遺構として奈良時代の竪穴住居跡、鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物跡や竪穴状遺構、溝跡、土壌、柱穴跡などがあります。出土した遺物としては須恵器や土師器、山茶碗、陶磁器などの土器類、鉄製品、「永楽通宝」などの古銭があります。2軒の竪穴住居跡からは須恵器の坏蓋と身がセットになって出土しています。

今回の調査区では中世の遺構や遺物が多く発見され、その時期に集落が営まれていたようです。土壌墓と考えられる遺構が数基あり、中でも長辺1.8m、短辺1.2mの楕円形の土壌からは副葬品として14世紀後半～15世紀前半の完全な形に近い土師皿数枚、美濃産の山茶碗、常滑産の甕、瀬戸産の天目茶碗などが出土しました。遺構の配置状況をみると、溝の周辺に土壌群があり、溝の内部に掘立柱建物群が存在していた様相がうかがえます。

その他に、一辺8～9mの方形の周りを幅2m程の溝が巡っている遺構がありました。方形の西側には河原石が密集しており、その中に、近世の陶器や瓦など

の遺物と共に骨片が混じっていました。溝の断面を観察してみると、砂層が入り混じっており、洪水などで埋まっては掘り直している様子がうかがえます。遺構の性格は不明なのですが、礎石と考えられる石が付近で発見されているので、お堂のような建物があった可能性があります。以前、調査区の周辺に地藏堂があったようで、関連があるかもしれません。今後、石を取り除いていくので、遺構の性格を決められる遺物が出土するか楽しみです。



お堂のような建物跡

季節の民具

日ごとに寒くなり、暖房器具を使う機会の多い季節になってきました。現在の家庭には様々な暖房器具がみられます。ストーブ、エアコン、ファンヒーター、そして「炬燵（こたつ）」。これが一番という人も多いのではないでしょうか。現在一般的なのは電気炬燵ですが、家電製品が普及する昭和30年代以前は、炭火を使って暖まる炬燵でした。今回紹介するのは「安全炬燵」といい、櫓（やぐら）の中に土製の火入れを入れ、上から炬燵蒲団をかけて用います。大きさは幅34.5cm、長さ34.5cm、高さ31cmで、格子の一面を上に乗せると炭火が入れられるようになっています。

炬燵には掘炬燵と置炬燵があります。掘炬燵は部屋の中央に小さな炉を切り、その中に灰を入れ、燵火（おきび）や炭を入れて櫓を置き、炬燵蒲団をかけて暖まります。室町時代に、都市で囲炉裏に櫓を設けて炬燵としたのがはじまりといえます。一般に冬季には炬燵を用いて、夏季には板の蓋をしていました。江戸時代の前期から瓦焼きの行火（あんか）に火を入れて炬燵蒲団をかけて用いる置炬燵も普及しはじめたといわれ

こたつ 炬燵

ています。安全炬燵は眠り込んで蹴っても安全であるとして、瓦製の置炬燵よりものにあらわれました。

農家では寝室の掘炬燵には櫓を設けず、足を伸ばして寝られるようにしたものが多く、また居間では、足を下に垂らせるようにし、櫓の上に板を置いて食卓がわりにしました。昭和30年代に入り、囲炉裏を焚かなくなると、この囲炉裏を掘炬燵に改造することが多かったのですが、やがて電気炬燵にかわりました。



安全炬燵

太陽禅師は、おもに南北朝時代に活躍した臨済宗の禅僧です。筑前（福岡県）の生まれで、名を義沖、号を太陽といいました。

太陽禅師は、建武2（1335）年に、中条氏に招かれて現在の豊田市に長興寺を創建しました。

中世の豊田市は、中条氏が大きな力をもっていました。承久の乱後、高橋の荘の地頭に任命されこの地を治めた中条氏は、信仰心が厚く、長興寺を開いた他に、猿投神社を手厚く保護したりしました。

禅宗の高僧の肖像を「頂相」といいます。この図は、右手に竹籠（ちくへい）をとり、曲（きょく）衆（しゅう）（いす）に正しく座す典型的



文化財シリーズ



けんぽんちゅうしゅうたいようぜん じ どう
絹本着色太陽禅師像

（県指定文化財）

長興寺

な頂相の構図をとっています。上部には禅の修業を完成した人格者を表現する理想の言葉が並び、最後に「貞和己丑南呂上休日 前往東福太陽叟書」との自賛（自ら文を添えること）があります。

禅宗においては、師僧が弟子に法を授けたあかしとして、師の頂相を代々受け伝えるならわしがあり、本図も貞和5（1349）年の陰暦8月に太陽禅師が自ら言葉を添えて、長興寺に収めたものといわれます。

ややいたみの目立つことが残念ですが、着衣の紋様、その色彩感覚や均質な線描などから、宋画を引き継いだすぐれた技法（はくらく）をうかがうことができます。

顔面の彩色も剥落が甚だしく元の表情が見られません。しかし、柔らかい墨線の描写によって、その容貌と姿が伝えられています。

資料館NEWS

○土蔵に資料展示！「商家の店先を再現」

郷土資料館の庭には市内から移築された土蔵が2棟建っています。今回この土蔵の内部を改装して展示スペースとしました。展示は「明治～昭和初期の商家の



店先」と「養蚕・鮎漁の資料」です。帳場台におかれた大福帳、銭箱、木の看板など、大人には懐かしく、子どもたちには珍しい展示となっています。

○Eメールアドレスが変更になりました。

新しいメールアドレス

rekihaku@city.toyota.aichi.jp

メールにて展示や催事の案内の送付をご希望の方は上記アドレスまで送り先、お名前をお知らせください。

○棒の手会館特別展示のご案内（猿投町）

「猿投山の自然と風物展」

平成13年2月28日（水）まで

猿投山一帯で生息する昆虫・きのこ・魚などを標本や写真パネルで紹介しています。めずらしいギフチョウや毒キノコの写真など多彩です。

利用案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 毎週月曜日（祝祭日は開館）、年末年始

入場料 無料（ただし特別展開催中は有料となります）

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩17分

■豊田市郷土資料館だより No.34■

平成12年11月30日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎（0565）32-6561 FAX（0565）34-0095

E-mail：rekihaku@city.toyota.aichi.jp